

重度障害児者の生活の現状と課題

Living conditions and problems of patients with severe disability

救命救急医療の進歩の結果、数多くの命が救われるようになった。その一方で、人工呼吸器を装着された重症患児者や重度の身体障害や認知障害を後遺症として抱える障害児者の割合が増えている。本特集では、小児から高齢者まで、重度障害児者の支援を実際に行っている各分野の専門家に、各方面からの解説をお願いした。

PICU における重症心身障害児—その課題と展望 齊藤 修氏 883

小児集中治療室 (pediatric intensive care unit : PICU) の始まりは、1967 年米国フィラデルフィア小児病院とされる。それから四半世紀後の 1991 年に本邦でも国立小児病院に PICU が初めて開設されたが、洋の東西を問わず、侵襲の強い介入は、生存率の向上と引き換えに多くの問題をもたらすこととなった。PICU における重症心身障害児の課題と展望について解説している。

地域における重症心身障害児のサポート 本田真美氏 889

わが国は国際社会においても先進国の 1 つとして、障害児・者に対する法整備を着実に進めてはいるものの、医療、福祉、教育など各分野において未だ多くの課題が残されているのが現状である。本稿では、地域で生活する重症児と保護者をとりまく養育施設やライフステージごとの課題について解説している。

遷延性意識障害患者への支援 太田 正氏 895

重症患者が救急搬送されてくると、まずは呼吸循環を支えて救急のための努力がなされるが、重度の脳損傷の場合、意識障害は必発であり、その後も遷延することがある。一方で、重度の意識障害がある患者は、急性期の治療だけでなく、リハビリテーションのケアの場面でも優先順位が低くされる可能性がある。重度の意識障害者たちへの望ましい支援とはどのようなものか、事例の経過を軸に解説している。

重度脳外傷者への生活支援 阿部順子氏 903

重度脳外傷者は意識障害が回復した後、まず身体障害が前景に現れ、身体機能回復のリハビリテーションを受ける場合が多い。しかし、若年層では身体機能の回復は目覚ましく、とりわけ社会生活に戻ってからは高次脳機能障害が問題として立ち現れてくる。本稿では、重度脳外傷者の新たな生活支援の現状について解説している。

認知症の人の地域生活支援 山口智晴氏ら 909

少子高齢化が進むわが国では、認知症は深刻な社会問題となり、世間の関心も高まっている。本稿では、認知症の人が発症当初の軽度の段階から、重度に進行してもできるだけ住み慣れた環境で意思を尊重された生活継続の実現に向けた課題と展望について解説している。

障害者の生活と医療ケア 花田貴博氏 917

筆者は、デュシェンヌ型筋ジストフィーで、現在、気管切開で人工呼吸器を常に使っている。神経筋疾患で医療ケアの必要な障害当事者である筆者自身の自立生活を通し、障害者の生活と医療ケアの現状と課題について解説している。

ニュース 書評 お知らせ	パラスポマガジン創刊—日本財団 888
	生涯通じ障害者支援—日本青年会議所（JC）と文部科学省、連携プロジェクト 894
	障害ある作家どう支援—モデル事業の報告書（愛成会） 921
	全事業障害に配慮—来年度予算要求へ見直し（文部科学省） 934
	認知症サポート医 1 万人に—2020 年度まで新目標（国家戦略） 953
	「ノーマライゼーション障害者の福祉」7 月号・特集目次 953
	パラリンピアンズ協会、未来の選手に奨学金—小学～大学生 50 万円を給付 958
	標準解剖学（評者：荒川高光） 965
	一般社団法人大阪府臨床工学技士会第 7 回実践呼吸療法セミナー 901
	第 4 回日本サルコペニア・フレイル学会大会 908
	第 13 回日本シーティング・シンポジウム 908
	第 7 回日本リハビリテーション栄養研究会学術集会 908
	第 18 回日本臨床リハビリテーション心理研究会 965